

水源地域対策アドバイザー派遣制度報告書

尾原ダム周辺
島根県 雲南市・奥出雲町

平成24年7月

島根県 雲南市・奥出雲町

NPO さくらおろち

目 次

1. 市町村の概要	3
2. アドバイザー派遣概要	7
(1) 第1回水源地域対策アドバイザー派遣概要	7
(2) 第2回水源地域対策アドバイザー派遣概要	14
(3) 第3回水源地域対策アドバイザー派遣概要	30
3. 水源地域対策アドバイザー派遣により		
見えてきた課題及び成果	45

平成 23 年度
水源地域対策アドバイザー派遣制度報告書

1. 市町村の概要

(1) 市町村名

島根県 雲南市 木次町

島根県 仁多郡 奥出雲町

(2) 派遣対象地域

さくらおろち湖（尾原ダム）周辺地域

雲南市・奥出雲町は、島根県東部である旧出雲の国の中心を流れる斐伊川流域の上流地域に位置している。当該地域では、斐伊川に伝わる八岐大蛇（ヤマタノオロチ）神話をはじめとして、須佐之男命（スサノオノミコト）や大国主命（オオクニヌシノミコト）といった古代出雲文化の伝説、遺跡、古墳が各地に残されている。また、中国山地の豊かな自然を有しており、それに育まれた豊かな食文化に彩られている。

過疎化・高齢化が進む典型的な中山間地域である両市町では、「雲南広域連合」による観光・地域振興、介護保険、消防業務などの広域的な事業の実施、共通的な課題解決に向けた取り組みや、雲南地域ならではの食・文化・環境を活かした地域振興につながる事業を展開している。

また、下流域を含めた2市1町（出雲市・雲南市・奥出雲町）の連携・協力による「出雲の國・斐伊川サミット」では、圏域の一体的な発展をめざすため、古代出雲文化や環境、観光、産業、芸術文化、福祉など様々な分野で交流連携を図り、圏域の活力を創出する共同事業を実施している。

(3) 市・町の概要

①雲南市

平成16年11月1日、旧大東町、旧加茂町、旧木次町、旧三刀屋町、旧吉田村と旧掛合町が合併して「雲南市」が誕生しました。

雲南市は、島根県の東部に位置し、松江市、出雲市に隣接し、南部は広島県に接しています。

市の南部は毛無山（1,062m）を頂点に中国山地に至り、北部は出雲平野に続いていることから、標高差が大きくなっています。市内には、斐伊川本流と赤川・三刀屋川・久野川、その他の支流である阿用川、吉田川などが流れています。

加茂町から大東町、木次町、三刀屋町にかけて、斐伊川と赤川、三刀屋川の合流地点を中心とした平野部が広がっていますが、吉田町、掛合町では中国山地に至る広範な山間部を形成しています。

総面積は 553.4 km²で島根県の総面積の 8.3%を占め、その大半が林野です。

雲南市内にはヤマタノオロチ伝説で知られる斐伊川が流れ、各地に神話や伝説が残り、加茂岩倉遺跡など多くの遺跡や古墳が発掘されています。こうした遺跡や神社、地名の由来は、「出雲風土記」にたどることもできます。

古くから斐伊川の支流周辺の低地では農耕が営まれ、山間地ではたたら製鉄や炭焼きが盛んに行われてきました。また、山陰と山陽を結ぶルート上に位置することから、古くから陰陽を結ぶ交通の要衝として栄えてきました。

(人口と世帯数)

平成 24 年 3 月末

人口総数	男	女	世帯数
45,870 人	22,135 人	23,735 人	13,421

②奥出雲町

平成 17 年 3 月に旧仁多町と旧横田町の合併により誕生した奥出雲町は、島根県の東南端に位置し、中国山地の嶺を隔て広島県と鳥取県に接する、神話に名高い斐伊川の源流域にあります。

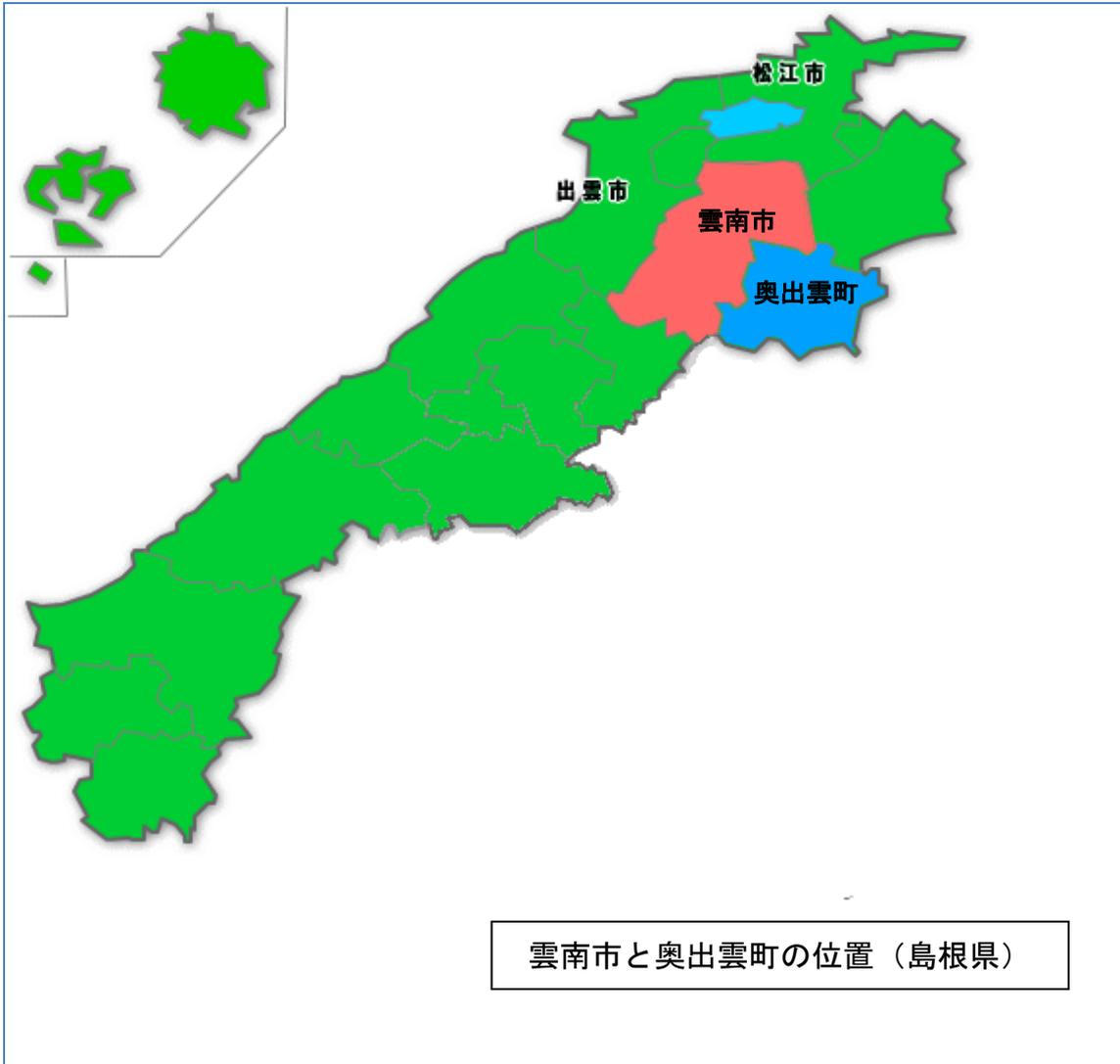
この奥出雲の地は、古事記、日本書紀の八岐大蛇（ヤマタノオロチ）退治や、素戔鳴尊（スサノオノミコト）が降臨したと伝えられる出雲神話発祥の地であり、古くから「たたら」製鉄で栄え、今でも世界で唯一、古来からの「たたら」操業を行い日本刀の原料となる「玉鋼（タマハガネ）」を生産しています。

本町は、地域資源を活用した仁多米、仁多牛、奥出雲椎茸、奥出雲酒造、高糖度トマトなどの地域ブランド化による産業の振興をはじめ、町 100% 出資の第三セクター設立による雇用の創出、空き工場・空き家を活用した企業誘致や定住対策の促進、^{かめだけ}亀高温泉^{たまみねさんそう}玉峰山荘、サイクリングターミナルなどの地域間交流の促進、また、県立自然公園で国指定天然記念物の鬼の舌^{したぶるい}震、日本一のトラストアーチ橋がある奥出雲おろちループ、^{ひぼどうごたいしやく}比婆道後帝釈^{せんつうざん}国定公園の船通山や、鉄の歴史を今に伝える^{いとほら}糸原記念館、^{かべや}可部屋集成館などの恵まれた自然と豊富な観光資源を活かした観光の振興などを進めております。特に合併後は、地域間格差の是正と均衡ある発展を目指す中で、いち早く情報通信網の整備に着手、全町で各家庭まで光ファイバーを接続した全国最先端の F T T H 網が完成し、超高速インターネット、ケーブルテレビ、I P 電話の利用はもとより、新たにテレビ電話による独居老人宅の見守りや在宅医療、生活支援サービスの構築を進めており、生活基盤・道路網の整備と併せ、健全な財政運営に努めながら合併後の一体感の醸成、地域経済の活性化に取り組んでいるまちです。

(人口と世帯数)

平成 24 年 3 月末

人口総数	男	女	世帯数
14,674 人	7,082 人	7,592 人	4,891



（４）さくらおろち湖（尾原ダム）周辺地域の現状と課題

さくらおろち湖周辺地域は、昭和30年までは旧仁多郡布勢村と三沢村、温泉村でしたが、温泉村は大原郡木次町と合併し仁多郡と分かれることになりました。

昭和32年、旧3村の中心にダム建設計画が浮上して半世紀、苦渋の決断と試練を乗り越え、ついに平成23年度末尾原ダムが完成する運びとなりました。

平成17年3月に「地域に開かれたダム整備計画」が国土交通省において認定され、島根県さくらおろち湖スポーツ競技施設（自転車・ボート）、道の駅などのダムを核とした地域活性化施設が完成しています。

このような施設を活用した地域づくり活動を推進するため、平成23年度から尾原ダム地域づくり推進連絡協議会が事業主体となって農林水産省の交付金事業

「食と地域の交流促進対策交付金事業」と、島根県の交付金事業「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」を導入して取り組んでいます。また、NPO法人さくらおろちが島根県さくらおろち湖スポーツ競技施設の管理受託はじめ、都市住民の田舎暮らし体験事業、ダムを中心とする上流部と下流域の住民による「そば打ち交流会」などの活動を行っています。

この他、温泉地区ダム周辺地域活性化対策協議会が10年前から毎年10月に「ダム湖まつり」を、松江市にあるNPO法人斐伊川くらぶが中心となって、春に湖底に沈む土地で「菜の花祭り」を開催してきました。

平成23年5月に竣工した道の駅「おろちの里」は、温泉地区内にあるNPO法人ふる里雲南が雲南市の指定管理者として、平成24年3月にオープンした交流施設「三沢の館」は、三沢地区の有志が組織する「とんぼの会」が奥出雲町の指定管理者として、また、平成24年4月にオープンする奥出雲佐白温泉「長者の湯」は地元NPO法人奥出雲布勢の郷が指定管理者として、それぞれ運営することになっています。

さくらおろち湖を中心に地域振興施設が完成し、管理運営主体も整いつつありますが、地域全体をまとめて互いに連携し、同じ方向を目指して邁進するエンジンが動いていない状況です。

雲南市、奥出雲町の行政の垣根を乗り越え、地域住民、地縁団体、活性化団体、企業、そして行政が一体となった取り組みをしていくことが大きな課題となっており、解決策を見出すため、今回、水源地域対策アドバイザー派遣制度を活用することとしました。



2. 水源地域対策アドバイザー派遣概要

回数	派遣日程	内 容	アドバイザー
1回	H23.12.2~4	12/3 ①講演会（安藤アドバイザー） ②女子おしゃべり会（松村アドバイザー） 12/4 斐伊川流域上下流交流（そば打ち）参加	安藤周治 松村紅実子
2回	H24.1.13~15	1/14 尾原ダム地域づくりセミナー ①講演会（松村アドバイザー） ②地域紹介（3団体：女性） ③意見交換会 1/15 尾原地区とんどさん参加	安藤周治 松村紅実子
3回	H24.3.10~12	3/11 食と地域のシンポジウム ① 記念公演（安藤アドバイザー） ② 活動成果報告（NPO 法人さくらおろち） ③ 食と地域の大会議	安藤周治 松村紅実子

（1）第1回水源地域対策アドバイザー派遣概要

- ①開催日時 12月2日（金）～4日（日）3日間
- ②場 所 奥出雲町「布勢コミュニティセンター」
雲南市木次町平田「温泉交流センター」
- ③講 師 水源地域対策アドバイザー 安藤周治
" 松村紅実子
- ④参加者 国土交通省 水源地域振興室 室長 橋本拓哉
" " 係長 田作光良
" 出雲河川事務所 所長 平山大輔 他
島根県 斐伊川神戸川対策課 課長 天津芳郎 他
雲南市
奥出雲町
NPO法人さくらおろち
NPO法人奥出雲布勢の郷
地域住民

⑤日程

12/2（金）奥出雲町サイクリングターミナルにて宿泊（国交省・講師）

12/3（土）AM 松村アドバイザー地域資源調査（案内：奥出雲町役場）

安藤アドバイザー到着後地域状況説明

尾原ダム・自転車競技施設・ボート競技施設視察

PM 講演会（講師：安藤アドバイザー）

女子おしゃべり会（松村アドバイザー）

夜 地域の食材を持ち寄った交流会

奥出雲多根自然博物館にて宿泊（国交省・講師他）

12/4（日）斐伊川流域上下流交流会「そば打ち交流」参加

場 所：雲南市「温泉交流センター」

参加者：松江市民、地域住民 70 名参加

⑥講演会概要

演題「水源地域における地域づくりを考える」

～NPOや地域、そして行政が共同で進める地域活動～

講師：安藤周治アドバイザー（NPO法人ひろしまね理事長）



【講演内容】

○ひろしまねの活動から

広島県三次市作木町は、ピーク時の人口が 7,000 人であったが、現在では 1,800 人にまで減少している。これは、38 豪雪による大雪挙家離村と 47.7 豪雨災害によるもので、平成 16 年三次市との合併により閉村した。

昭和 45 年に「作木未来会議」を立ち上げて急激に進む過疎化にどう対応すべきかを討議してきた。その後、昭和 57 年に「過疎を逆手にとる会」、昭和 61 年に「江の川流域会議」を立ち上げ、活動を進めてきた。

今、中国山地では、高齢化率 50%近い町村が続出している。過疎化は下げ止まり少子社会無子化現象が起きている。老人の口から「わしの葬式は誰が出してくれるのか」という一言が発せられ、少子化が身に詰まされた。

限界集落が続出し、集落崩壊と暮らしの基盤が崩壊してきている。また、合併が急ピッチで進み地域の実像が見えにくくなってきた。

そこで、大字・小学校エリアでの「自治区」「振興区」の創設が急がれ、NPO法人も視野に「もう一つの役場」での地域経営が必要となってきた。

このような活動を通してNPO法人ひろしまねを平成16年に立ち上げた。

○広島県三次市作木町の取り組みと今後の展望

・「もう一つの役場」で持続可能な地域の創造を！

行政が担う役場機能の他に、地域には「もう一つの役場」が必要である。

この役場では、「なんでもどころ」ひと・もの・こと・たよりを総合したPPP(Public Private Partnership)型地縁組織づくりを目指した次の取り組みを展開すること。

ア．農村起業（里山保全管理・産直運営機能）に着目して、耕作放棄地をはじめとした保全管理や、産地直売方式の運営機能をもった農村型企業の支援を行うこと。

イ．生業の確保という観点から、ベンチャービジネスやコミュニティビジネスの開発運営を行うこと。

ウ．地域住民の生活支援を行うため住民サロン機能を持つこと。

エ．都市との対流交流を行うため、交流訪問者受付機能を持つこと。

オ．総合事務局機能により、地域計画の提案をすること。

カ．地元の人が主役で管理・経営・運営を自己決定自己責任の上で行うこと。

このようなマルチ型機能をもった「役場」を起こすことが大切である。

・ふる里信託機構構想（仮称）の提案

不動産の管理の不行き届き、山林原野の境界不明、山林の資産評価の下落、耕作放棄農地の原野化、鳥獣害被害の拡大、そして、合併による農業委員定数削減がある。

このような厳しい状況乗り越えていく対策として、ふる里信託機構構想を設立して次の取り組みを行う。

ア．農林業振興のための貸し出し

イ．治山治水など公的役割に対する管理の充実

ウ．交流・体験関係団体などへの貸与

エ．米など基本食材の確保と配送で、食糧防衛、安定収入システムの確立

安藤アドバイザーからは、広島県三次市作木町における大変厳しい状況下

における、これまでの取り組み、今後の課題について示唆に富んだ話を聞きました。

⑦女子おしゃべり会概要

○司会 今日女性だけの会 普段、考えていること悩んでいることなど気軽に言い合い、地域づくりについて考えてみましょう。

○松村 大分県で豊の国づくり塾に携わり、バラバラだった地域を1つにして、誇れる地域にするための1村1品運動が始まりました。しかし、合併後、今までよきライバルだったところが急に仲間になってしまい、モチベーションが低下。ここは「さくらおろち」と聞き、さくら=女、おろち=男 というイメージ。この場所は輝いている女性がたくさんいるところだろうと思っていたら、実際はそうでないと聞いてこの会になったけど、みなさんどうですか？

しかし、実際はそうでないと聞いてこの会になったけど、みなさんどうですか？

「女性の三種の神器」があります。

「おしゃべり」「でしゃばり」「うるさい」

おしゃべりでは、「いいところ」を言う。女性のネットワークのすごさは素晴らしい。使えば、PR効果絶大。

うるさいは「情報力」がそれだけあるということ。

でしゃばりは「行動力」があるということ。

この3つを持っている女性を中心にうまく組織を作ると、うまく進む。

言葉もわかりやすくキーワード化してみても。

例えば「ニタッと笑って、ヨコたわる」(仁多・横田)、いかが？

想像力こそたくましさ。

○司会 いつも思う。色々な建物はあっても、いつも男性だけで相談していて、非常に使いにくい。女性の意見を取り入れれば、こんなことはない。

○松村 だから、もっと輝いてほしい。輝けるステージをみんなでつくってほしい。

○司会 でも、輝き続けることも疲れるんですよ。

○松村 だから、みんなでやるんです。

(ここから、参加者の自己紹介&自分がしたいことについての話)

○参加者A 自分は手作りのものが好きだから、手芸をしたい。けれども、普段の生活ではなかなか、そのようなことができない状況。そういうところがあれば、行ってみたい。普段は女性部としての活動を行っている。文化祭には皆さんに来て頂き、皆さんの協力のもと豚汁などをつくってふるまっている。

○松村 一歩踏み出すことが大切。したければすればいい。おしゃべりの場をつくるだけでもいい。

- 参加者 B いろいろとやりたいことはある。そして、色々と商工会女性部としてやってきた。しかし、地域の活動に参加しても、発言力が小さい。家庭があり、なかなか自由に動けない部分もあるが、自由に動ける人たちと一緒にトロッコ列車で販売したり、尾原ダムをつかったサイクリングロードと観光をむすびつけたらどうかなどと色々と考えたりする。なんとか、地域活性化できたらなと思っている。
- 松村 自分が行きたいことなら、自分が好きなことなら女性は絶対に時間を作ってでも行く。それが女性。ということは、今は自分がしたいような、行きたいようなイベントがないのではないか。いつも主催者のしたいこと。つまり、主催者＝男性のしたいこと、ばかりなのかも。だから、「何が好きなのか」から始める。数人でもいい。集まって何がしたいのか。そして、好きな人にまかせること。
- 「さくら」というのはとてもいいネーミング。その切り口から何かないか。視点を変えると見えてくる。
- 司会「地域活性化」をするって何を目的にするかで随分と変わってくる。地元の人がどれだけ関心があるかでも異なる。
- 松村 地元をどうやって取り込んでいくか。地域にメリットがないとだめ。知恵を聞き出す会など作ったら。そうだ！「おろち女子会」立ち上げたら！
- 参加者 C 布が好き・布を縫うことが好きだから、それが好きな人あつまれ！と綿恋クラブを結成し、活動して10年。色々なことがあったが、ネットワークも広がった。その会でいいことは、いつもみんなが前向き。お茶を飲むときの話の内容もただの世間話や雑談ではなくて、次の作品をどうやって作ろうかとかどんなコンセプトで・・・という前向きな話ばかり。そういう時間は時がたつのを忘れる。
- 想いがあっても、横につながっていかなければ、点ではだめ。
- 参加者 D クッキーやパンをつくるのが好き。それを文化祭で販売し、とても好評を頂いた。家庭のことで忙しいが、少しでも貢献できれば、また嬉しい。
- 松村 さくらおろち湖にちなんだクッキーを作ったら？道の駅は田舎料理！と銘打っている割にはコンセプトがないような気がする。ただの卵焼きやおひたしでは人は感動しない。工夫がなければ、だめ。そうならないように「おろちクッキー」をぜひ作ってみて。
- 参加者 F 私も文化祭でお手伝いした。人がやるならする。自分が中心となってしまうことは難しい。けど、やってみると楽しかった。
- 松村 どうやらさせるかが大切。子どもと一緒にやってすることもいい。
- 参加者 E 元気に活躍している人が多いなと実感。仕事上、奥出雲町内の何百人と会ってきて、元気ですばらしい技術や趣味を持っている人が多いことに気付

く。しかし、それをみんな知らない。それがとても残念なこと。私たち行政にできることは、それをつなぎ、その場づくりをすること。自分のしていることを認めてもらえて、共有できることで幸せを実感。

○松村　そうですよ！行政から押しつけるのではなく、やりたい人とやりたい人をつなげるからこそ、今必要なことです。どんどん進めて下さい。

○参加者 F　現在は仕事をがんばっている。レストランのメニュー開発にも携わられてもらっている。いい方向になれば・・・と思っている。

○参加者 N　とにかく男は飲んで食べているだけ。会合をしても全然、先に進んでいない。だから、この現状。奥出雲町内の全員が佐白の温泉のことに興味がある。多分、みんな、うまくいかないだろうなと思っている。私も思っている。そうならないように、みんなでしないといけないが、なにせ、男がつまらない。

○松村　そうですよね。じゃあ、この場で決めましょう。たとえば、7つの約束を決めてしましましょう。女で具体的な目標を決めてしまうのです。想いはあるのだから。女の知恵と行動力が今必要。

けれども、単体でワ～ワ～言っても認められない。とくかく会をつくることも大切。「おろち女子会」つくりましょうよ！

○参加者 M　そんなに男性がだめなら・・・おろち退治女子会は！・

○みんな　笑

○司会　おろち（男性）は酒をのませて退治するから、おろち女子会じゃあ、新年会をします。そこからスタート。

○参加者 T　男性がつまらない。これは私も実感している。それから、新しい意見を取り入れる人がいない。この地域はそういう地域。結束力がないと感じている。

○参加者 S　雲南市でホースセラピーをしている。子どもに接している中で、子育ての悩みを共有できるスペースが必要であると実感。そんな会ができればいいなと思っている。今、NPOに入っている。いままで、ずっとNPO形態の勤め先。今回、NPOに入っているが、名簿をみてびっくり。女性代表となっている・・・。どういうことだ。NPOだが、行政の外郭団体というイメージが強い。これではうまくいかない。

○松村　色々な話を伺った。今日は時間がなくて残念。

しかし、おろち女子会が立ち上がったから、とりあえず、動き出してみよう。いかに真剣にできるかが大切。

自分を変える必要あり

自分が好きなことから始めましょう

じぶんが好きなことから始めましょう

そうすれば、自分が好きなことをしている自分は輝いているのです。

自分の名前でキーワードをつくるなんてことをするとキラキラできる。

地域づくりに目をむけてやってみましょう。

まずはこのメンバーでおろち女子会を！

○司会 地域づくりについて考えることのできたよい会でした。

それでは、新年会で。

【第1回を終えて】

○安藤周治アドバイザーの講演から

尾原ダム周辺は、政策によってできた施設に起因する過疎高齢化の急速な進行にこれからどう対応するのかという課題があるが、江の川流域における自然災害（豪雨・豪雪）による人口流出による地域の疲弊に真っ向から挑戦していく姿を学んだ。

「過疎を逆手にとる会」代表でもあった安藤氏は、お年寄りばかりが目立つ地域の実態を、面接による実態調査をした上で、現在地域住民が求めていること、将来、この地域を維持していくために必要な施策、これを実現していくための行政と住民の具体的行動、について実例を示しながらの講演に次のことを学んだ。

- ・既に言われてきたことではあるが、これまでの歴史を振り返ることに精力を使うことではなく、「これから歩む道をどうするか」を行政はじめ企業、住民組織、地域住民が真剣に取り組まなければ未来に明るさは見えてこないこと。
- ・そのリーダーは、住民の中にいなければならない。また、将来を担う人材の育成についても本格的に取り組まなければならない。
- ・厳しい状況を乗り越えていくには、まず、自ら汗を流して努力することが大事。行政が準備したメニューをこなすことも大変であるが、それを超える知恵を出していく必要がある。

○松村紅実子アドバイザーとの話し合いから

この会は、男性入室禁止令であった。

地域を盛り上げていくためには、女性の頑張りが重要であり、「女性が輝くところは男性がついてくる」という発想は真実である。特に松村氏が大分県の出身であることとは関係なしに、国内で地域づくりに成功しているところには「元気な女性」がいる。

山陰の女性、とりわけ出雲の女性は「おとなしい」面が目立つが、内に秘めた強い部分と表裏一体のものであり、話し合いの中にもあるように、「女子会」を立上げて「ここに奥出雲の女あり」を目指していくことが求められている。



⑥ 講演会概要

演題「女性が輝けばまちが輝く」

～サクラのオロチ退治～

講師：松村紅実子アドバイザー（オフィス計都代表）

皆さんこんにちは、大分から参りました松村紅実子と申します。「女性が輝くとまちが輝く」さくらのオロチ退治というのは何なんだろう、と思いますよね。初め「さくら」は女性で「オロチ」は男性にしようかと思っていました。この時代なので、さくらを女性でソフト分野、オロチはハード分野で悪い因習とか、そこでオロチ退治が始まったのではないかな。

今、世の中が求めているもので安心・安全という言葉聞きます。しかしただ安心・安全だけでいいのだろうか、安定・安易・安息・安住なども求められています。すべての漢字にウカヌメリの下に「女」という字がつくので女性に関係しているのかなと思います。

「今いる自分の場所はどこか、そこで何をしようとしているのか、何がしたいのか」と考える際に、ダムが出来て「さくらおろち湖」がある場所に皆さんは居る、ということです。そのダム湖で何かをする際に、「空間・和む場所」があり、「遊び楽しみ」「歴史」を顧みて「過去」のことを思い出す。遊び楽しむ為には「遊ぶ物」があり、「満足」して「思い出」が出来、再び訪れて頂くために何が出来るか「流域」が一緒になり考えていきましょう。

地域が自分たちの適正規模を見極めて、「身の丈に合った地域づくり」をしなくてはならないと思います。無理をせず、やりたいことを仲間と一緒に楽しく協力を得てやらなければならないということが基本です。

私たちの生活に欠かせない「衣食住」という言葉があります。現代は「慰食充」。「慰」は慰められる、「食」は健康のために食べる、「充」は充たされるという「慰食充」です。

地域づくりは観光だけではありません。私は流域連携の立場で言いますが川は昔、道で道沿いに様々なつながりがありました。流域が連携するのは治水・利水はもちろんですが、水資源の確保や水源地の整備など社会的価値の善のために流域が連携をしなくてはならな

いということですよ。

「何をしたいのか。しなくてはならないのか。誰がおこなうのか」について私の自論になりますが、「ことば」の中にヒントが隠されています。

「れんけい」はどういうことなのか。「れ」は連絡網がしっかりしている。「ん」は？がないこと。分からないことや不満がないか。「け」は経験、様々なことを知っているのか。「い」は皆と一緒にいきましょう。と言うのが「れんけい」のヒントだと思います。

「れ」は歴史、「ん」は運命、「け」は結果・結論、「い」は生きるというのがヒントになり、連携をしなくてはならないのでしょう。

しかし、連携を行う上での人づきあいとは何なのか。話づらいこともあるのではないかな。

私の住んでいる大分市に私が名付けたポルトソールという通りがあります。皆で仲良く町づくりをしたいと思いアンケートをとりました。周りからは屈辱的な言葉がかえってきました。元々、裏通りという名前でしたので変えたいと思い行動を起こしましたが、その時、人づきあいは大変だとつくづく思いました。

ある時、「隗よりはじめよ」という言葉がひらめきました。「カイ」がヒントです。隗さんの隗は、界隈のカイ、つまり身近なところから始めましょう。仲間をつくりましょう。壊れるという壊、そのヒントは懐かしいものではないか、怪しいものにもヒントがある。それが解ったら、やりガイがあるようにやりましょう、皆が・・・これもカイ・・・、解る・・・これも解・・・までやりましょう。言葉には意味があります。

人づきあいのヒントは「言技」（ことわざ）にあると思います。住んでいる人は十人の色があるということで「住人十色」、皆バラバラ、分かっている人はわずか。「八方見人」は情報収集して八方から見れる人になりましょう。「頑固鳥の鳴くところには閑古鳥が・・・」、何かやりたくても、反対する頑固な人がいるところはさびれてしまう。「貧しい人は幸いである」、豊かになれる可能性を秘めている。「人ごみの中にソを聞きに行く」、誰にでもいいところがあるのでそこを育ててあげましょう。「仲間は度胸おかみは愛嬌」、偉い人には愛情を持って接してほしい。

地域の中にもコーディネーターが必要です。先を読む、情報に強い、夢を語る、強い好奇心、弱音を吐かない。強い人脈を持っている人がコーディネーターにふさわしい人です。

男性受けする女性活動家はどのような人かを聞きました。自分の考えをしっかりと持っている人、嫌味にとられない性格の人、同性の女性に好かれなくてもいいが嫌われないこと。

男として応援したくなる女性の条件は何ですか、と聞くと、グループ実績がある、輝いている、公的なお金をあてにしないグループ、地域活動に頑張っている人は応援したくなる、という答えを男性からもらいました。

女性の付き合い方について、私は「女のサタは歳しだい」と言います。年上の女性の話は上手に聞くこと。年下の人には姉御タイプでいてほしい。同年代の人には同等の話をしたらいいのではないかな。

女の仕事の心意気は「Si Go To」がヒント。まずはSi、シングルの気持ちで。独身で

仕事をがんばっている気持ちと行動を見せてほしいです。Go は、女はあまり謝らない。ごめんなさいの言葉を忘れずに。To は、友達をたくさん作ることを意識しましょう。

「女の三種の神器」は、おしゃべり（お金のかからないPR隊）うるさい（様々な情報を持っている）でしゃべり（行動力がある）を女も男も活かしてください。

「ほうれんそう」という言葉がありますが、報告・連絡・相談です。これに女性の場合の茹で加減と塩加減を付け加えました。茹で加減は（時間）話す時間を考えましょう。塩加減は（演出）、演出をして話をすると話が活きてくる。報告・連絡・相談は茹で加減と塩加減を見てやりましょう。

「男と女のABC」は、笑顔・挨拶・英語を大切に。A は、英語は自分の得意分野を活かしてほしい。B は気をつけてほしいこと、「ブス」とならないように、「ぶつくさ」も見苦しいのでやめましょう。「ぶりっ子」もやめましょう。C は、「シーツ」。うるさく言うのはやめましょう。「シークレット」は、秘密は秘密にしましょう。「嫉妬」もやめましょう。

また、オロチとさくらの話に戻りますが、オロチの「お」は男性中心、「ろ」はローカル「ち」は遅で、進まない何かがあるのではないかと。さくらの「さ」は一時的で長続きしない、「く」は苦勞していないか、「ら」は楽・楽しくなるにはどうしたらいいのか。以上のようなことを考えて取り組みをしたらいいのではないかと思います。

次は何をすべきか、「オロチ」で考えてみましょう。「おさ」という言葉があります。長のことですが、「おさ」となる人は思いやりを持ってほしい。「ろ」は労働、男はロマンチストであるが迷惑をかけない程度の男のロマンであってほしい。「ち」は地域のためにという気持ちでやってほしい。

そのためにすることは、「さくら」で考えてみましょう。「さ」はさらっと、さりげなく、「く」は口ばかりでなく、「ら」は楽（らく）をしない。オロチの「お」は、おせっかいをする、「ろ」はロックをしない、「ち」は近づいてほしい。「さくらおろち」からの言葉のヒントです。

では次のようになるように、「さ」はさわやかに咲いて、「く」はくじけず、「ら」は楽をしよう。「お」は応援しましょう、「ろ」は六根を活かす、「ち」はパワーを与えてほしい。

私は歴史をヒントにしたまちづくりをおこなってきました。実施したのは「お墓参りツアー」、「大友河原市」、「もったいないワゴン」、「宇田姫御膳」「ワインパーティー」、「おばあちゃんのコンテスト」などなど。

これからの観光は、見て・交わる観光。楽しみながら体験ができる観光に移っていくと思います。

【自分を変える12か条】

1. ダメな事には原因がある
2. グチより「解決案」を考えろ
3. 過去は過去。でも、未来は創れる
4. 人をけなす人は、自分もけなされている
5. 人がやろうとする事を見て、自分もやろうと思え
6. 創造できることはやれること
7. 分かってくれる人は必ずいる
8. 嫌いな人ほど、好きな人
9. 一人から「全体」のことを考えられ

るようになるろう 10. みんなでやればできる 11. 「夢」は忘れないこと 12. 自分を愛することから始めよう

そのための第一歩は簡単です。名前がヒントです。私は紅実子ですので

く：くじけず み：みんなを こ：心地よく（困らせる）

自分の名前で、これから一週間、1か月とキーワードを作ると意外と目標が見えてくるのではないかと思います。まず自分がやらないとダメです。まず第一歩を踏み出してください。

⑦地域の取り組み紹介

【吾郷康子（木花工房）】

木花工房は、平成19年10月に女性9名男性2名の11名で結成いたしました。雲南市の地域資源である桜を活用し、桜染の製品を制作販売しております。製品はスカーフ、ハンカチ、ネクタイ、化粧ポーチ、バックなどで、おかげさまでお客様の要望をいただき年々種類は増えてきています。

また、年間を通して体験染めも受け入れており、季節に合った桜、たとえば春は枝から、夏は緑の葉、秋は紅葉から色をいただき染めています。

よく、なぜ桜染を始めたのか？と尋ねられます。

ご存知の通り、木次町は桜の名所として知られています。特に、平成2年日本桜百選に認定された斐伊川堤防桜並木は、毎年たくさんの花見客で賑わっていますが、この桜並木には長い歴史と共に、桜をいつくしみ育てた町民と桜とのドラマがありました。

こうした話を町民に知らせ、後世に語り継いでいってほしいと、町民参加創作劇「桜並木の物語・ひと花の吹雪」を上演したのが平成10年でした。

この劇にかかわったのがきっかけで、私の桜への想いが大きく変わりました。

木次に生まれ育ち、木次に嫁いだ私にとって、身近に桜の木があり春になると花を咲かせるのが当たり前であったこの桜が、単に好きだということから、いとおしくなりまして、もっとたくさんの人に桜の素晴らしさを知ってほしい、春だけでなく1年を通して桜に興味を持ってほしい大切にしてほしい、そして先人から受け継いだ木次町の財産である桜並木を次の世代にも受け継いでほしいと思うようになりました。

その為に私に出来ることはなんだろう。長い間考えていました。しかしなかなかこれ！というものに行きつきませんでした。

そんなある時、知り合った愛媛県の友人が草木染をしていることから、桜で染めることが出来ないか？と考え始めました。身に着けるものなら、一年を通して桜への想いを寄せてもらえる。これだ！と思いました。

しかし、思いついたのは良いですが、教を乞う人がいません。私自身桜染を見たこともありませんでしたし、いったい桜で染めることが出来るかどうかもわかりませんでした。

あらゆるツテを使い、やっと九州にいる染色家を探し出し、教えていただくようお願いをしましたが、桜色を出すのに何年もかかって見つけ出したのに教えることは出来ないと言われましたが、それでも何時間後にはやっと基本的なことだけは教えていただく事が出来ました。

12月から2月にかけて桜守さんによる桜の枝の剪定が始まります。この剪定する枝には、すでに花を咲かせる準備をした花芽がついています。やがて、蕾を膨らませ、美しい花を咲かせる小枝です。今までは、この小枝すべて捨てられていました。でも、この時期の桜からでないあの「さくら色」は出ないと知りました。花を咲かせるために、この時期 木全体であの桜の花の色を作っているのです。

今は、一部ではありますが、木花工房がいただき、死ぬ運命にある桜の木から色をいただき、もう一度 今度は布の上で花を咲かせる事が出来るようになりました。桜からもらった色なら何色でも構わない。桜染には違いがないのだから。桜色がなかなか出ないのを自分で納得させ、それでも桜色を目指して挑戦を続けてきました。

桜は色々な色を持っています。ベージュ、オレンジ、ピンク、紅葉した葉からはグリーン、茶色、金茶色、木の芯からは鉄媒染をしてグレー、そしてそれぞれの桜の種類によっても、剪定した時期によっても色は変化します。

昨年ソメイヨシノから綺麗な桜色が出ても、今年同じ木から同じ色が出るとは限りません。一期一会と申しますか、面白いと言えば面白いですが、染料を作る私からすれば、何年たっても難しく頭を悩ます作業なのです。

それでも、10回の煮出し作業をすれば、3回は桜色が出るようになりましたので、皆さんが求められる桜色の染を提供することが出来るようになりました。

体験染めもしていると申しましたが、体験染めは私にとって桜の話が出来る絶好の機会です。特に小学生の体験染は桜守さんにもお願いし、桜葉の採取方法や桜についてのお話をさせていただいてから体験染めをしています。

子供たちは、桜の木の種類の多さや花の違いなどを興味津々で聞きながら、緑の葉からオレンジやピンクかかったベージュに染まることに驚き、また、作り上がる達成感や喜びを経験するこの時間は、私にとっても幸せな一時となっています。

子供たちには桜染を通して、桜を大切に、故郷に誇りを持つ心を伝えていきたいと思っています。

そしてもう一つ、今力を入れていることに「食べても美味しい桜」があります。

3年ほど前になるでしょうか、島根県の国際交流員の皆さんが研修で工房を訪れたことがあります。その時、せっかく桜染を見学に来ていただいたのだからコーヒーより桜茶をとお出ししたのです。スーパーで買って来た桜茶でした。桜の花の色が無くなるくらい何度も塩出しをして出したのですが、「からい」「おいしくない」と誰ひとり飲む人がいませんでした。ショックでした。日本のおもてなしとしての桜茶が「不味い」と聞いては、美味しい桜茶を作るしかありません。

そこで誕生したのが木花工房の桜の塩漬け Sakura 舞です。

Sakura 舞はお茶だけでなく、桜ごはんや焼酎のお湯割り、お菓子作りなどに利用していただける「食べておいしい桜」です。

おかげさまで順調に販売させていただいていますが、これも自然相手ですので多くの量が出来ませんので、今は、県内では木次町・松江市・斐川町の3軒、そして東京駅のエキキュートで販売させていただいています。

また一方で、一昨年から雲南市農商工連携協議会「さくらプロジェクト」が発足いたしました。桜の力、桜の魅力を引き出すよう商品開発に取り組んでいます。昨年の末には、尾原ダム「さくらおろち湖」周辺に桜の植樹をいたしました。この桜は、食用にするためのもので、無農薬・有機栽培で育てていきます。

この桜の花が使えるようになるまで、最低5年はかかるでしょう。

それまでは元気でいなければと思っています。

昨年の春は色々な製品を試作いたしました。桜の塩漬けは関山という品種の八重桜を使っていますが、御衣黄でも塩漬け作ってみました。味は関山とは全く異なり、少しお茶の味がして、美味しいです。ただ、無農薬の御衣黄はあまりありませんので、そこが問題です。

そのほか桜ジャム、桜塩、サクラ酒、など試作いたしました。試作品は様々なところで試食してもらったり、料理に使うことを考えてもらったりしています。

最後になりますが、還暦を迎えるようになって、新しいことを始めた私達を、人は「よくやるねえ」と言いました。なにかを始めようと思った時、「もう遅い」ということは無い！と自分に言い聞かせ、人にも言ってきた私ですが、今実感としてそう思っています。

年を重ねたことで、今までに培ってきた「人」という財産があったから、今こうして『さくらを活かす』仕事が出来ています。桜で染めること、剪定した枝をいただく事、マスコミでの宣伝、展示販売の場所、桜塩漬けの販売店、等々 本当はたくさんの方たちに助けをいただき教えていただき、今こうして続けていくことが出来るのです。感謝しています。

いまはまだ、仲間全員が現役で、仕事を持ち働きながらの活動ですが、無理をせず、かといつて怠けず、着実に一歩ずつ歩んでいきたいと思っています。

桜の製品を求めて、雲南市へ、木次町へ、足を運んでもらえるような木花工房になることを目標に、「今日が一番若い日」と心につぶやきながら、これからもみんなで力を合わせ頑張ってまいります。

【山根陽子（ごはんのじかん）】

「ごはんのじかん」の活動を様々な場所でPRしていましたが、ダム対策課の西川課長からセミナーで発表をしていただけないかと誘いがあり、引き受けることにしました。以前から子供の頃の食事、記憶を通して家族・母とつながっていると感ずることがありました。また家族の食事を作るようになってからそういう思いや我が家の味を子供たちへつなげていこうと思いました。

そんな折、飲み会の席で何気ない一言から企画は動きだしました。その場では料理の話になりました。「煮しめがなかなかうまくつくれないが、伝統的な料理が出来るようになるとカッコイイと思わん」と、年上の人でさえ「いつも味が違うわとか、誰かにほんものの味を教えてもらいたいわ」など聞こえていました。するとその場で「料理教室でやってみては」という声があがりました。その声は斐伊交流センターの深田主事さんでした。私たちはそれがきっかけとなり活動を始めることになりました。一緒にやることになったみつこさんと最初は興味のある人が集まって教えていただく軽い気持ちでした。

斐伊地区はダム周辺地域から移転された方が住んでおられる地域でもありますし、「ごはんのじかん」のメンバーの中にも移転された方がいらっしゃいます。また市内でも人口が減らない地域でもあります。しかし住民同士のつながりが薄れてきたり行事への参加率低下など様々な課題がありました。

そこで、地域づくり協議会で策定された今後5年間の地区振興計画には世代間の交流や女性の地域行事への参画など様々な方策が盛り込まれ、具体策を企画しておられる中で料理教室の話が持ち上がったので、地域づくり協議会の活動として位置づけてやろうということになりました。

そこで、みつこさんとあわてて5回シリーズの企画を立てて、7月に斐伊地区全戸へチラシを配布し参加者を募りました。この企画に興味をもってくくださった男性2名、女性22名、合計24名の応募がありました。こうして世代間の交流や地域の食文化の継承をテーマに掲げて「ごはんのじかん」がスタートしました。

ネーミングは募集チラシを作りかけている時思いつきました。そして私たちがこの企画に込めた思いは次の2つです。「食の記憶でつながる」「受け継ごう、そして伝えていこう」食の大切な所、地域の味を大切に受け継いでいきたい思いがこの地域に広がるようにと願いを込めました。

そしてこの会には4つの願いがあります。1つ目は「出会いの場」です。縁あって私たちは雲南市に住んでいるのでこの出会いを大切にしてほしい。2つ目は「地域のよさを感じあう」四季折々の風景、おいしい農産物、受け継がれてきたふるさとの味、改めて見直すことで地域の良さを感じあう時間となるような企画を考えました。3つ目は「思い」というスパイスです。毎日の食事づくりは大変なことですが、大切な人のことを思い食事づくりをする、このようなスパイスは大切です。4つ目は「伝えていこう」それぞれの家庭で大切にされている味や地域の味を受け継ぎ、日頃大切にされている思いを伝えていきたいと思います。このような願いを込めてスタートしました。

【第1回目】「はじまりのじかん」(8/25)です。16年間斐伊地区に住んでいますが始めてお会いする方もおられそれぞれが新しい出会いの場となりました。参加のきっかけや食に関する思い出などは興味深いものがありました。また、期待の高さも感じました。

【第2回目】「煮しめのじかん」(9/17)です。煮しめ本来の味を習いたいという声を受け、地域食生活改善推進協議会の3名の方に講師として来ていただきました。本物の味を習

うことが出来皆様に満足をしていただきました。また、講師の方に「手間をかけることの大切さは分かっているながら毎日のこととなると大変、でも今日習ったことを心の隅においといて自分の味を作っていってね」と言われ印象に残りました。

その翌週、9月25日に開催されました斐伊地区の高齢者ふれあい交流会で弁当作りの手伝いをしました。メインの調理は食会さんが行われましたが、サポートとして赤飯を盛り付けたり卵60個分の卵焼きを作ったりと130人分の弁当を作りました。参加者の皆様にも喜んでいただき少しでしたが地域のお手伝いをすることができました。

【第3回目】「お楽しみのじかん」(10/22)です。講師は松江市の土井さゆりさんをお願いし、今回は6品目を教えていただきました。その内の一つでパンナコッタというデザートがありますが、これが次回に大活躍をします。

【第4回目】「ふるさとまつりのじかん」(11/13)です。斐伊地区ふるさとまつりではさくら餅と先月教わったパンナコッタを出店しました。たくさんの方に買っていただき大忙しですべて売り切れました。地域に貢献でき善い経験をさせていただきました。また、当日はこれまでの活動をパネル展示し、地域の皆様に「ごはんのじかん」を知っていただくきっかけとなりました。

【第5回目】「ゆずのじかん」(12/3)です。ゆず料理が習いたいとたくさんの方が要望されこの企画を立ち上げました。講師は温泉地区に在住の荒砂さんをお願いしました。荒砂さんが日常食べていらっしゃるゆず料理を持参していただいて試食させていただきましたが人気があり教わりたいという声がたくさんありました。参加者の皆さんはとても満足していらっしゃいました。また、荒砂さんから山菜おこわ、ゆずみそ、おからを使ったサラダの作り方を教わったりもしました。

5回の「ごはんのじかん」があつという間に終わりました。毎회가すごく楽しくて会を重ねるごとに笑顔や会話が増してきました。メンバーからも地域の皆さんとの新しいふれあいの場ができ善かったと感じていらっしゃいました。1月21日には「おかわりのじかん」を開催します。

今後は「仲間の輪を広げる」、楽しみながら活動している私たちに興味を持ってくださったり、若い親さんたちに参加してもらえるような時間があってもいいかなと思います。また地域の料理名人の方に料理を教えていただきたいと思います。斐伊地区に限らず市内の食を通じた活動をおこなっていらっしゃる団体さんとの視察・交流会などもおこなってきたい。その上で教わったことで地域に貢献できたらいいと思います。

思いつきの一言から始まった料理教室ですが、そこに込められた思いを皆さんで共有し、楽しい時間を過ごすことができたことは幸せなことでした。一緒に企画を進めてきた斐伊交流センターの皆さんやみつこさんも充実感で一杯だと思います。みつこさんの一言で「今年は初めてだったので至らないこともたくさんあったけど、この企画がはじまったことに意義があるよね」と言われました。最後に今日のセミナーのテーマである「女性が輝けばまちが輝く」について考える時、私たちのイメージは「笑顔で皆が繋がっていくこと」

かなと思います。

【坂本暢子（雲南花舞台を実現する会）】

雲南花舞台を実現する会の坂本暢子といいます。タイトルを「四季折々の自然景観を整備・雲南市を花舞台に」ということで発表させていただきます。団体設立のきっかけは10年くらい前になりますが、数人で集まり飲み会をおこなうといつも高齢化が進み空家が増えた、田畑はさるやいのししの被害で困っているなどの話題ばかりでした。何とかして魅力ある地域にして安心できる方法はないものか模索していました。その折、友人が考えてくれたのが「雲南花舞台構想」というものでした。その構想に賛同し、「雲南花舞台を実現する会」を結成しました。

平成13年11月設立し当時は9名、現在は21名で活動をおこなっています。会員も木次、掛合、吉田、松江など多方面に亘り職業も様々です。

「雲南花舞台構想」とは。雲南市は桜の名所でたくさんの皆様に来ていただいておりますが、それ以外の施設でも四季折々楽しめるように整備し観光に来てもらえるように関連ビジネスを繁栄させようとするものです。

私たちが整備しようとしているものは、一度植えたらあまり手間をかけなくてよい紅葉する花木、花が咲く木です。

花舞台には5つのシナリオがあります。

【その1】「景観と眺望はセットで整備」するものです。眺望点と景観は別の所にあつて、眺望点から景観を見ろというものです。例えば三刀屋遊山荘から三刀屋・木次を眺めた場合の両方をセットで整備するものです。

【その2】「景観の主役」は山々、並木道、田畑、史跡、家並みを調和させるというものです。

【その3】「春夏秋冬を代表する花木を植栽」

景観は年間を通して楽しめる内容にデザインし、春夏秋冬を代表する花木を植栽します。

木次・三刀屋の桜の次は吉田のつつじ、次は掛合のあじさい、次は大東のいちょうというように雲南市へ行けばどこかで四季が楽しめるように整備する。

【その4】「景観セットはネットワーク化」します。国道・県道・広域農道などを利用して訪ね歩きやすいようにつなげます。

【その5】「環境ビジネスの循環」山を整備するとまず間伐・枝打ちをします。それで出た木材をバイオマス利用で自然エネルギー化をします。木を切った場所には植栽をします。雲南市では森林バイオマスの活用と市民参加による「たたら山づくり事業」を進めようとしておられるので活動に接点があるのではないかと思います。

次にこれまでの活動の様子を紹介します。

1. 県の景観アドバイザーに来ていただいて市内を歩き景観について指導を受けました。

2. 1) 植栽活動（食の杜）

食の杜の入り口にイタセコイワが数本植栽されていて、アドバイザーから「数本植えてアーチ状にしたらいいのでは」と提案があり、早速作業に取り掛かり数年後に見ごたえのある並木になりました。

2) 植栽活動（温泉神社）

木次町温泉地区に歴史的な温泉神社があります。その神社の裏山の木が伐採されていて、アドバイザーから指導を受けました。まず、地元と話し合い理解の基に植栽をしました。植樹は市長、中学生の皆さんに参加していただきました。

3. 他団体との交流

雲南市内には景観に関する活動をおこなっている団体が多数あります。その団体と連絡を取り合って活動を進めていくべきと考えました。そこで、シンポジウム、交流会を数回開催し、専門家のアドバイスを受けたら思いを語り合いました。

4. 児童・生徒への啓発・植栽（木次中）

- ・生徒さんに植栽活動に対する思いを語りその上で活動に入りました。

児童・生徒への啓発・植栽（加茂中）

- ・加茂中学校の生徒さんと赤川沿いに植栽をおこないました。

児童・生徒への啓発・植栽（四季の森）

- ・寺領小学校の裏の赤土の丘に「四季の森」という森を造りました。植栽場所を4つに区切りまして春夏秋冬の花木が楽しめるように植栽をしました。

5. 先進地視察（鳥取）

- ・鳥取県の環境大学の周辺の街路樹を視察しました。きれいでいちょうが黄色に色づいていました。

先進地視察（大阪）

- ・万博公園跡が現在はきれいな森になっていました。また、淀川周辺3キロにわたり並木道が出来ていて散策コースになっていました。

私たちは活動を見直すことをしました。有志のみで出来ることでなく雲南市全体で景観づくりのランドデザイン指針を作っていただいで、それに基づいて行政と伴におこなうべきではないかと話し合いました。そこで平成20年4月に雲南市長宛に「雲南市の景観について」という要望書を提出しました。これを受けて雲南市では「雲南市自然の幸協議会」を設置されランドデザインの指針づくりが始まりました。

その後、ワークショップ、学習会、視察などをおこなって現在指針（案）が出来上がりつつあります。指針（案）として

1. 市内に点在する風景ポイントを少しグレードアップしよう。
 - ・駐車場、案内板、トイレなどの整備をおこなう。
2. 風景ポイントをネットワーク化、HPで紹介（ぶらり雲南旅マップ）
3. 新しい風景ポイントの整備

- ・尾原ダム周辺、他の風景ポイントの整備。
- ・尾原ダムさくらおろち湖周辺植栽計画、ワークショップへの参加。
- ・尾原ダムボート競技施設竣工にともない桜（3本）を植栽。

【今後の活動予定】

1. 市内活動団体との交流・情報提供や支援
 - ・市内活動団体と連絡をとり、情報提供や支援をおこなう。
2. さくらおろち湖周辺整備植栽に向けての新しい仕組みづくり
 - ・市内・市外の人に記念植樹をおこなっていただく。
 - ・記念植樹推進連絡会（仮称）の設置検討をする。
3. 若い世代への啓発
 - ・子供達を巻き込んだ活動にし、ふるさとの思い出を抱いて巣立ってほしい。

終わりに、雲南市は全国さくら名所100選に選ばれたさくらの名所であり、後世に残していくことが私たちにとって大事なことである。木を植栽して生長するには長い年月がかかります。私たちの活動は通過点に過ぎませんが、行動を起こすことが大事であると思います。今後も皆様の協力の基に活動を進めてまいります。

■意見交換会

【司会者】 水源地域対策アドバイザー 安藤周治氏

【助言者】 〃 松村紅実子氏

(安藤) それではパネルディスカッションを始めさせていただきます。まず、取り組み紹介をしていただきました3名、松村さんへの質問を受けたいと思います。

質問がないようですが、吾郷さんにお尋ねしたいのですが、なぜ、「木花工房」という会の名称にしたのですか。「さくらの会」がいいのでは。

(吾郷) 演劇「ひと花の吹雪」に出演していた時に、役柄が「木花散る姫」という乳母さくらの姓でした。「木花散る姫」はさくらの神様と言われていることから役名を使わせていただいて「木花工房」としました。

(安藤) 聞いてみると奥が深いですね。劇のシナリオはどなたがお書きになりましたか。

(吾郷) 4回おこなっていますが、1回目の時は木次町出身の大原さんがお書きになりました。

(安藤) 山根さんにお尋ねします。運動を起こすときには「つぶやき」が大事なんですよ。興味や関心を持つことがすごく大事なことです。回数を重ねられる度にいろいろな問題があったと思いますが、例えば材料を調達するのも大変ですよ。

(山根) 材料はなるべく雲南の物を使用したいと思います。今日の話聞いていて「さくらの塩漬け」と「パンナコッタ」をデザートとして採用していただけないかと思えます。

(安藤) 坂本さんにお尋ねします。なぜ、手間がかからないとというものの樹木にしたの

ですか。「水仙」が一番手間がかかりません。

(坂本) 「水仙」もいいですが、高齢化、人手不足などで何もできなくなる。しかし、木は植樹し手間をかけなくても10年たつと育つということで樹木にしました。

(安藤) 景観づくりはまず風景ポイントの整備という発想は、どういうことから描かれたのか。

(坂本) 都会に住む幼なじみから「育った場所はどうなってる？」と言われた時、荒れてしまっていることからこのような発想が生まれました。木を切って植栽すれば循環型でバイオマスにもなると、10年前に提案していただきました。

(安藤) 10年前でしたら合併前ですよ。合併をしたことが渡りに船のような気がしていませんか。

(坂本) 合併前に合併協議会が発足するというので私はメンバーとして参加しました。その場で「景観でまちづくりをしよう」ということも基本方針に盛り込んでいただきました。

(安藤) 会場の皆様から質問はありませんか。

(奥出雲町の女性)

皆様のすばらしい活動を知って「女性が輝けばまちが輝く」ということを実感させていただきました。1人が動けば周囲が変わる、10人が動けば地域が変わるということを思ったところです。2つ質問をします。

1) 3団体ともほんの少しの思いつきで活動を始めたとおっしゃいましたが、思いつきから実際に行動に移るまでの時間、また行動に移せたポイントを教えてください。

2) 失敗した事例があれば教えてください。

(安藤) 吾郷さんからお願いします。

(吾郷) 私たちは木次の桜をたくさんの方に知っていただきたいことからスタートしました。たまたま友人が草木染めをしていて、ひらめきで桜を原料に染めができないかなと思いました。当時、島根県商工会女性部の会長をしていて、様々な方の応援をいただいて桜染めについて調べました。そこで、九州に1人おられ教えていただくために現地へ行きました。桜染めは葉が散ってから花が咲くまでの枝でなくてはならないと教えていただきました。最初は1ヶ月煮ても色がでませんでした。今も完全に煮出しをおこなえば色がでるということはありません。去年は桜色が出来ない時期でしたが今年は比較的出来ます。

(安藤) 山根さん、企画が動き出すポイントとして飲み会の席が大事であると思いますがその他にありますか。

(山根) 飲み会が4月でチラシを作ったのが7月でした。その間、交流センターで構想を練っていたのですが、企画が動きだしてからは職員の方がアドバイスをくださったりして進んでいきました。今なら「何でもできる」ようなエネルギーが沸いて

きて不思議な一年でした。

(安藤) 神がかり的ないかにも雲南市の女性のよい所みたいな感じがします。では坂本さん失敗例がありましたらお願いします。

(坂本) 植栽をおこなう場合、場所を選定しないといけません。雲南市はコスモスレガッタをおこなっています。その際、斐伊川の河川敷をコスモスで飾ろうとしたのですが雨ですべて流されて残念でした。木次公園の斜面にレンギョウとユキヤナギを植栽しましたが管理を怠ってしまいその後は植栽を断念しました。植栽をおこなう場合は管理と計画を立ててやらなければならないと感じました。

(安藤) 大きい計画はあるが施業計画を怠っていたということですね

(斐伊地域づくり協議会会長)

昨年3月に斐伊地区の今後5年間の振興計画を作成しました。その中で地区の課題・現状が浮き彫りになりました。人口は増えていますが、地域活動の主体が男性中心であり、今後5年間で若い女性の皆さんに地域活動に参画していただくようなことを考えて計画を作りました。作成した途端に今の話がでましてこれはよいことだと思いました。今後地域の諸活動に若い女性の皆さんの意見を取り入れていただくように地域づくり協議会として一緒に活動をしていきたいと思っています。

(安藤) ありがとうございます。多分、どの地域でも同じような女性の方がいらっしゃると思いますが、この場にそういう方はいらっしゃいますか。

(佐世地区地域自主組織代表)

今までの地域づくりセミナーは補助金で活動をおこなっているというものでした。今日のセミナーは自分達で自主的に活動をおこなっていくというもので、私が思っていたことと違って、課題について話し合いながら活動をしておられ私も枠にとらわれず自由に話ができることを考えていけないと思いました。

(安藤) 自主組織の活動もマンネリ化することもあるので事例が出るのが大事であると思います。(ごはんのじかん)のみつこさんに活動について話していただきたいと思います。

(山根) (ごはんのじかん) はさりげない一言から始まった料理教室です。始めたことに意義があり、一歩踏み出したら地域の皆さんとのつながりがありました。少しずつでもつながりを通して自分達にできることを作っていったらいいと思います。

(安藤) 地域の中でやればできると思っている人が必ずいます。子育てを終えた若い女性のみなさんでおしゃれの会など開いて活動の出発点にされたらいいと思います。

(掛合町の女性)

活動の始まりは何かをしたいという気持ちであると思います。活動するにはお金が必要であるとおもいます。予算はどのように確保しているのか。また、活動が自主組織に繰り込まれていく際、橋渡しは大切であると思います。行政として有

志の活動をどのように支援をする考えなのか伺います。

(安藤) 今日はお金の話がでなかったのですが、坂本さんどうですか。

(坂本) 最初は県の補助金を活用して活動をおこなったり、また、雲南市の地域振興補助金で苗木を購入して植栽をおこなったりしました。現在は会費のみでおこなっています。

(安藤) 山根さんはどうですか。

(山根) 会費と地域振興補助金で活動をおこなっています。

(安藤) 「ふるさと祭り」でなく「バザー」などは考えていらっしゃいますか。

(山根) 小さなことでいいので、出来るのかなと思っています。

(安藤) 吾郷さんいかがですか。

(吾郷) 思いが形となり活動が始まったことは、友人の力が大であると思います。

私の場合は島根県のいきいきファンドの補助金と資本金として会員が出資して立ち上げました。現在は会費をいただいています。在庫がありますので赤字です。1週間のうち、火・木・土で仕事をおこなっています。

(安藤) ありがとうございました。こういう場で行政の補助金の話はしますが、まちづくり関係はお金儲けの話は今までしなかったですよ、逆に避けていたと思います。まちづくりはボランティアでおこなうというものでした。しかし、それでは組織の維持はできません。これからはお金儲けを考えてもらいたい。地域の中で小銭が回る仕組みをどのようにつくるのか、まちづくりをおこなっていく皆さんの役目かもしれません。

(吾郷) 働いていただくお金はわずかです。しかし、皆様が喜んでいます。

(安藤) お金儲けの方にも興味や関心を持っていただきたい。市の考えを伺いたい。また、橋渡しについてどのように支援をするのか。

(雲南市政策企画部小林部長)

雲南市は合併し6つのまちが一緒になり、「市民と協働のまちづくり」を柱にかかげ市政を進めております。そうした中、地域で取り組んでいる方は多くいらっしゃいます。本日は3名の方に取り組みを紹介していただきました。行政は住民の皆さんの主体的な取り組みをフォローし、また、皆さんの取り組みを市民の方に知っていただく機会を市で作る必要があります。輪が広がることで、高齢化、少子化等に対応できるのではないかと思います。支援について平成23年度までは地域振興補助金、平成24年度からは交付金化という形で新たな制度としてスタートすることにしていきます。こうした制度を活用していただきながら地域の輪が広がっていき、行政が支援するスタンスで「協働」でまちづくりを進めていきたいと考えております。

(安藤) 最後に3名の方に一言ずつお願いします。坂本さんから。

(坂本) 私たちの活動は息の長い活動ですので、長続きするように楽しくやりたいと思い

ます。

(山根) 一言がきっかけでこの場にいることがすごく不思議な気がしています。「やればできる」ということを人生で初めて感じることができました。今年は失敗をしていると思いますが失敗と気づいていないと思います。次回の「おかわりのじかん」で皆さんと話をしながら来年につなげていきたいと思っています。

(吾郷) この時期は12月から始まる染料作りでは大鍋で煮出しをしますが、この作業を1週間から10日します。力仕事は夫が協力してくれます。今日が一番若い、明日は1つ歳をとっていく。だから「今日出来ることは今日やらなければいけない」これからもがんばっていきこうと思っています。

(安藤) ありがとうございます。松村さん、まとめをお願いします。

(松村) 女の人はずごいなと皆さん思ったと思います。男の人もずごいけど、女の場合は独特の根性、負けん気、自信と思いたいものがひしひしと感じます。もちろん女性だけでは出来ない部分を男性が暖かい目で見えて支えて手を出してほしいというのが女性からの気持ちだと思います。「生きがい」ということで。

1年楽しみたかったら花を植えるとよい。10年楽しみたかったら木を植えるとよい。100年楽しみたかったら人を育てるとよい。という言葉がありますが、今の時代というのは、どこか探せばお金も手もさしのべてくれるような人がある時代になってきたので、自分の思いを実現するように一歩踏み出すということです。時間がかかるかもしれないけど、その思いは絶対に消えないです。皆さんの思いを誰かに語る。実現できないものはないと思います。後は行政が暖かく見守って市民と心のコミュニケーションができるようなまちづくりをしていけばどんなことでもできるのではないかと思います。

(安藤) ありがとうございます。今日登壇していただいた3人の方はとてもよかったなと思っています。これまで雲南は地域づくりについては住民の振興協議会が中心で今日はPO型のグループですよね。そこと地域の皆さんがリンクしていくのがこれからであるし、すでに山根さんのグループは動き始めている。

今後、地域で個性的なグループがどれだけ手をつなぎながら動いていけるかという時代の変化がきているのではないかと思います。話を聞かせていただきました。お金の話では、自信を持ってやっていただきたいです。3人の方は完全に資本金を1おく(億)づつ持っているわけです。奥さんですから。笑・・・

今日は松村さん、3名の方ありがとうございました。

【第2回を終えて】

○松村紅実子アドバイザーの講演から

今回は、「女性が輝けば地域が輝く」をテーマとしたセミナーを開催した。

前回の講演会における「女子会」結成への足掛かりという意味合いも含めて松村

氏の講演を聞いた。

参集者は、テーマに沿い女性の占める割合が多く、講演の内容も歯切れの良い、キレのある話で、言葉のもつ意味合いと女性の心意気を活性化させることに重点が置かれていた。一方、会場の男性に対しても女性の活動に対する支え方、気配りへの精神を熱っぽく語ってもらった。

若い女性が少ない地域の中での取り組みではあるが、女性の輝きで若い女性が住みやすい、また、住みたい環境づくりをしていかなければならないことを実感した。

○3 団体活動報告から

「やればできる。」ことを率直に感じた。ほんのわずかなきっかけから始まった活動が次第に地域で輪を広げ、発表にあった実績を積み上げてきたプロセスは、口に出して言えない苦労もあったことと思う。それを乗り切る女性のパワーを松村氏の講演にもあったように、皆で温かく支えあい、女性が核となる協働社会を築きあげることが、これから重要になると実感した。

(3) 第3回水源地域対策アドバイザー派遣概要

①開催日時 3月10日(土)～12日(月)3日間

②場 所 雲南市木次町「チェリヴァホール」大会議室
雲南市加茂町「ラメール」
奥出雲町横田「たたら刀剣館」

③講 師 水源地域対策アドバイザー 安藤周治

〃 松村紅実子

④参加者 国土交通省 水源地域政策課 係長 田作光良

出雲河川事務所 副所長 玉田一雄 他

島根県 斐伊川神戸川対策課 課長 天津芳郎 他

雲南市

奥出雲町

NPO法人さくらおろち

NPO法人奥出雲布勢の郷

地域住民

⑤日程

3/10(土) 三刀屋町「ホテル上代」にて宿泊(国交省・講師)

3/11(日) AM 加茂町内視察

雲南神楽フェスティバル鑑賞(ラメール)

PM 講演会(講師:安藤アドバイザー)

「食と地域の交流促進対策交付金事業」成果報告（野田専務）

食と地域の大会議

（コーディネーター 作野広和

コメンテーター 安藤アドバイザー 松村アドバイザー）

夜 地域の食材を持ち寄った交流会

三刀屋町「ホテル上代」にて宿泊（国交省・講師他）

3/12（月）松村アドバイザー奥出雲町内視察

鉄の博物館 たたら奥出雲刀剣館 たたら角炉伝承館等



第1部

■講演（NPO 法人「ひろしまね」理事長：安藤周治）

【演題】「地域のたからもの」を活かそう！～これからの水源地域における地域づくり～

地域づくりも現在は随分変わってきたと思っています。行政の時代でなくなっているということです。予算が減らされる中で知恵を働かせて地域の方々、企業、行政とあらゆる分野で協働しながら今後のまちづくりについて考える時代にきていると思います。

そういった中で水源地域を今後どう守っていただけるのか、また水源集落を維持する為にはどうすればいいのか、そういう時代にきています。

まちづくりを考えていく中で思い当たる節がありました。まちづくり、地域づくりとはくらしの質を高めることが目標ではないか。安全・安心な仕組みづくりにつながっていくと思います。「地域のたから」ということですが、「いいとこさがし」ということです。私の住んでいる所もかつては人口が約7000人いたが現在は1800人を切っています。かつての地域の姿が現在そのまま残っているのではないか。そうではなくてそれぞれの地域がそれぞれの歴史をもって暮らしてきた証を探すことが「たからをさがす」ということになるのではないか。今年の古事記編纂1300年にまさにダム奥出雲がその舞台であると思います。奥出雲の文化と歴史が注目されるのはこれからではないか。そのための「まちづくり」ではないかと思っています。

「いいとこさがし」を行う上でまず地域を歩くということが第1です。現場を歩くことの大事さ、違った道を歩く上で散歩の仕方など気づく点はあるのではないか。「目利き」眼力を養うこともあります。

現在は高齢化社会です。しかし、高齢者は大きな財産であると思っています。高齢者の方々から話を聞き、ヒントを得て物事に向かって行くこともできるのではないか。

「器用貧乏村栄え」これは悪い表現で使われます。起用な方々が少なくなり不安を持っています。中山間地で農業を行っていく上で大事なことは「総合的な活動」ということです。専門性だけを高めることだけというのは田舎にはマッチしないのではないか。総合的な視点で物事を考えたりすることがまず大事です。

また「ロットが小さい」ということです。規模が小さいということであるので物を作っても経費が高くなります。補助金があればいいが独立採算制では運営できません。補助金分野では省庁を超えた法律改正も必要ではないかと思っています。

我々の仲間が邑南町で新しい組織を作りました。たまたま組織を作った後、新聞屋さんが新聞配達をやめたいので組織でやっていただけないかと依頼がありました。それを受けて新聞配達をやっています。新聞配達だけでなく彼らが目指しているのは配達時に一軒ずつ声掛けをおこなうということです。安否確認をしながら新聞配達をするものです。

中山間地域で事業を考える際、そういったことが参考になるのではないか。

NPO 法人と地元自治会等と連携しながらやっていく中間組織のようなものがひつようではないか。

明日、国土交通省で別のグループと勉強会があります。集落支援のための中間組織がやってくる上で環境づくりができないかという検討会を先月は新潟県、広島県で行いました。明日は東京で両方の情報交換をしながら「中間組織のありかた」ということで検討会をおこないます。地域が先頭に立ち物事が動き始めている地域づくりの流れではないかと思っています。

私が住んでいる作木で今までに行ってきたことの事例があります。地域の課題は高齢化、若者の減少という状況です。地域住民の不安が地域の衰退へとつながっています。こういった状況を打開するために、いきがいの持てる暮らし方、地域に活気がでるような仕掛けとはなにか、安全・安心な地域も必要であるということを議論しました。地域にはお金はないけど財産はあるのではないかと。棚卸をしてみると結構あります。まず、地域のお年寄りを活かすのが一番ではないかと思いました。そこで「名人」さんをメインにして体験のプログラムを作成しました。

また、「旅の体験」、新しい旅を体験するような仕組みづくりができないかという事を考えています。田舎料理でおもてなしをしたいと思っています。企画を作成して実際に作木に来て頂いて口コミでお客さんを増やしたいといろいろやってきました。20人で単価が3000円ですので収益はありません。しかし、こういう体験を行わないと感心・興味も起こっていかないと考えます。

【体験報告】

- 1) 田舎文化伝承「とうふづくり」
 - ・体験者に好評でした。
- 2) 馴れ寿司づくり
 - ・おちアユを使用した寿司。
- 3) お年寄りによるガイド
- 4) 竹炭づくり
- 5) 米づくり
 - ・酒づくり体験

【今後の活動に向けて】

中間組織（株）わかたの村を5名で創りました。これからは地域をリードすることが大事ではないか。NPO法人でそれができるといことです。住民が活躍できる場をコーディネートしていくことだと思います。

【事例報告】

- 1) 「地域のたから」山梨県須玉町
 - ・「須玉の食べ物歳時記」を作成して配布。
 - ・世界の事柄を歳時記に掲載。
- 2) 「人と自然が元気な里山循環再生事業」灰塚ダム
 - ・新しい公共事業

・ 社会福祉法人が中心。備北湖域生活活性化協議会の設立。

① 食の循環

- ・ 家庭菜園の残野菜を集荷して福祉施設へ提供。
- ・ 対象が高齢者であるので地域通貨の発行。
- ・ 福祉施設利用時に地域通貨を使用。

② エコストーブの利用・促進

これから地域を考えていく上で新しい旅の提案がなされると思います。旅は地域の総合文化財「総合文化活動」であると思います。旅も体験型に変わってきていて今後の流れである。私たちも新しい旅について調査をしてきました。銀河鉄道の旅です。大森銀山の銀を尾道、笠岡から北前船で出しています。もう一つは江の川です。中国山地には「たたら」鉄の道が多数ありました。拠点としての情報はありましたが流れ・道筋を作って検討してみる必要があるのではないかと。

改めて旅について整理をしてみました。「地域づくり」のための新しい旅で理解をしていただくとよいです。地域の様々な魅力を活かした観光というイメージでとらえていただきたいです。

1つは場所がどこにあるのか。あるいは場所だけでなく、地域の魅力でいえば食べ物、人であったりします。それを活用する際にガイド、暮らしを通して地域を語れる人が必要です。

我々の議論の中では、観光の力を地域の魅力向上につなげることはできないかということを考えています。これが新しい観光の役割になります。観光は目的でなくあくまで手段です。新しい旅の効果について、地域にお金落ちることが期待できます。地域でお金が回る仕組みが出来るということだと思います。地域が豊かになれば観光の質が向上し、関わる人のやる気がでてくると思います。

そして、地域社会へ与える効果について①地域の価値の再発見、②生涯学習の効果、③地域の魅力の継承効果④ネットワークの確立があります。

もう一つ大事になってくるのが、社会技術を身につけることです。地域の中でどう合意形成を得ていくのかということです。そして観光を地域のプラスへ結び付ける技を身につける必要があると思います。

現在、水資源の関係で審査を行っているプログラムがあります。この地域からも日帰り、宿泊コースで水に親しむことをメインにした旅の計画を提案していただきたい。しかし、地域に連携を生む技術がこの地域は弱いかなという感じです。せつかくの古事記編纂1300年ですので、首都圏へ情報提供ということになれば単体のNPO法人では力が弱いのではないかと。地域、行政が連携して情報発信してプログラムや企画を提案していかないとせつかくのチャンスを逃してしまうことになるのではないかと。地域の連携、協働が課題であるとおもいます。共通の実践の場が新しい旅の企画・実践であると思います。手間がかか

っても誰かが根回しして手堅くやっていけば成果が見えてくると思います。素材がありますので地域の皆様が協働して具体的に踏み出してほしい時期にきているのではないかなと思います。

広島県に上下町という町があります。電柱の地中化も完成してカラー舗装もおこなっています。何よりも町の人たちが「おしゃべり」です。また、お宅が古物商というか古いものを展示して歴史を守っている町です。是非訪ねていただきたい。

(司会者) 安藤様ありがとうございました。水源地域に対するあつい思いを聞かせていただきました。

ここで東日本大震災から1年になります。亡くなれた方々に黙とうを捧げたいと思います。黙とう。

黙とうを終わります。10分間の休憩。

第2部

■事業報告 (NPO 法人さくらおろち専務理事 野田真幹)

一つ目は平成23年8月から平成24年3月まで「さくらおろち湖 食の学び舎プロジェクト」で「食べごと塾」を8回おこないました。

二つ目は通信版「現代版食の神話づくり」で1号から3号まで発行しましたがあと1号の発行を予定しております。

この「食べごと塾」は参加者同士の交流はもとより、さくらおろち湖周辺で行う際に情報発信していかなければこの事業の意味が薄れてしまうということで通信版「現代版食の神話づくり」をさくらおろち湖周辺の自治会へ全戸配布しました。また、メールで希望者、現在約100名へ発信をしています。今後ホームページでご覧いただけるようにしようと思っております。

三つ目は農林業の助っ人「スサノオ要請講座」を行いました。野菜の生産過程で都会の方々に参加していただいて体験するだけでなく、深い交流をして頂く目的で3回実施されました。皆さんに真剣に取り組んでいただきました。また、炭焼き体験も行いました。

今日は時間もありませんので「食べごと塾」について話をします。これを行うにあたりいろんな文献を調べました。奥出雲町では横田を中心に古い文献のレシピを残していらっしやいました。一番参考になったのは取り組んでいた「人」でした。また、そこから人の輪が広がってすばらしい人たちに出会えました。すばらしい人というのはお年寄りの方々です。最近はずぐに物が手に入る時代ですが、昔は手に入らない時代でした。食べ物を作ることに感動があつてこそ記憶が今でも続いています。

奥出雲町には「飛竜頭」という料理がありました。がんもどきではなく、最高の御馳走でした。当時「豆腐」は人をもてなす時に作った。豆から作っていたので頻りに食べれる物ではなかった。その豆腐を揚げて作ったのが「飛竜頭」でした。触感はぱりぱりしてい

てその源は麻の実でした。戦前は麻の実は庭先にありましたが、戦後は切られてしまいなくなっていました。それ以後「飛竜頭」は食べられていないということです。

そのほかの物に対しても、どのようにだしをとったのか聞き取りを行ってこの会で「飛竜頭」を再現しました。これが第1回のテーマでした。

この事業に最後まで携わっていただいたのがIターンの方でした。その方は現在雲南市にお住まいですが、1年後には食べ物を通じたビジネスを行いたいとおっしゃっています。その方に昔の味にこだわって頂き試行錯誤していただきました。輸入物の麻の実も購入して昔の「飛竜頭」にチャレンジをしていただきました。それと同時に現代でも美味しく食べれる「飛竜頭」ということでひまわりの種を使って作ってみました。

当日は復刻版と現代版を食べ比べてみました。復刻版の方が人気がありました。また、「ごじる」という豆を使った料理も作りました。こういう物を美味しくいただくことから「食べごと塾」がスタートしました。

2回目は雲南市の温泉地区で行いました。地元の加工グループの方々と豆腐づくりをしました。交流をすることで皆様に喜んでいただきました。当時は石臼を使って豆腐づくりをおこなっていて、簡単に手に入るものではなかった。

3回目は、キーワードが「煮しめ」で奥出雲町三沢地区で行いました。「味工房みさわ」の方々と「煮しめ」を作りました。味は丁度よい味でした。素材は地元の物を使用していて現代の人が食べても納得のいく物でした。我々が古いものを掘り下げていくうちに気づいたことがありました。

戦後の頃は砂糖が貴重で料理などに使うことがあまりなかった。しかし、自由に使えるようになると料理にも使うようになってきた。現在は取りすぎが問題になる時代である。ところが、戦後の物がなかった時代の味付けが現代は評価される。

4回目は、宍道で行いました。さくらおろち湖周辺で食べられてきた「すもじ」という食べ物を作りました。これはちらし寿司の基みたいなものかもしれません。最初は昔の味が再現できず苦労しました。出し汁に煮干、甘味には日本酒を使いました。また、切り干し大根でいろいろやってみました。現在はハンガーを使用して切り干し大根を作っている。もう一つは「八日焼き」という針供養の際に食べたお焼きを作りました。

5回目は、御餅を作りました。実際に杵と臼を使用して行いました。また、雑煮にもこだわってみました。この地方では雑煮に岩海苔をのせていますが、これは全国的にも珍しいことです。

6回目は、雲南市の尾原地区のとんどさんに参加しました。用意されていた料理が、いのしし汁、あゆ、牡蠣などでした。地域文化が失われていく中で、尾原地区のとんどさんのスケールに度肝を抜かれました。最後にスルメを焼いたり、灰を浴びるとよい事があるなどの話を聞きました。その後、公民館で「七草粥」を作りました。春の七草は健康的にもよいと言われていますが、植物に詳しい森林インストラクターの方をお呼びしてそれぞれの薬草の効用についても説明していただきました。

7回目は奥出雲町の布施地区で行いました。古民家を改造して食について取り組んでいらっしゃるグループの所へ行きました。この時は、地元の食材を使った新しい試みということでそばの中に酢を入れたりとかして美味しく出来上がっています。奥出雲町で地元の婦人さん方を雇用してコロケづくりを始めた方がいて紹介していただきました。

8回目は宍道で行いました。塩麴について学びました。鳥の胸肉を塩麴に漬けておくと高級な食材に生まれ変わります。また、今回は手作りのうどんを作りました。

時間もなくなりましたが、この事業はもう一年やります。今度は素材を取り上げながら来年度進めていきます。

最後に一つだけ報告事項があります。この事業を進めるにあたって月一回サークルを開いています。毎月第二水曜日にある公民館で19時から20時に行っています。毎回食材について語っています。

ご清聴ありがとうございました。

第3部

■パネルディスカッション：テーマ「食」と「地域」

1) パネラー紹介

- ・ 温泉地区ダム周辺地域活性化対策協議会 事務局長 江角望 様
- ・ NPO 法人奥出雲布勢の郷 理事 酒井恭子様
- ・ とんぼの会 事務局長 糸原健二様
- ・ NPO 法人ふる里雲南 理事長 斎藤文隆様

2) コメンテーター紹介

- ・ NPO 法人ひろしまね 理事長 安藤周治様
- ・ オフィス計都 代表 松村紅実子様

3) コーディネーター

- ・ NPO 法人さくらおろち 理事長 作野広和

【作野】

今日は長時間に渡るシンポジウムですが、たくさんの方に残っていただいて身が引き締まる思いがしています。今から「食と地域の大会議、さくらおろち湖周辺における食を活かした地域づくり」というテーマでパネルディスカッションを行います。

前半の半分はパネラーの皆様が所属される団体の紹介をテーマに報告をいただきます。後半は皆様に登壇いただきましてコメンテーターの皆様とディスカッションを行います。

今から4つの団体の代表から報告をいただきます。始めに報告を頂きますのが温泉地区ダム周辺地域活性化対策協議会・江角さんよろしくお願ひします。

【江角】

私は事務局長をやっております江角といいます。まず、尾原ダムもほぼ完成ということ

で3月4日に試験放流を行いました。次に協議会の生い立ちを紹介させていただきます。

この協議会はダム建設に伴いまして移転をよぎなくなされた皆様、各方面の関係者で作られた元木次町「ダム対策協議会」の流れを引き継いで組織された団体です。この協議会の目的といいますとダム建設、移転に関わる歴史や意義が風化されないよう、また地域の活性化が今後円滑に進むようにと立ち上がった会です。それでは活動報告をします。

まず、ダムを中心に上下流交流をおこなっています。松江市八束町の皆様とそば打ち体験を行いました。当日はダム移転者でもあります松本会長に指導をいただいて体験をしていただきました。この交流会では松本会長よりダム建設に伴う当時の体験談を語っていただきました。次にダム湖へワカサギを放流し追跡調査を行いました。尾原ダムも満水を迎えて、自転車競技施設・ボート競技施設も完成し今後湖面利用が盛んになってきます。

そこで協議会では昨年よりワカサギで活性化ができないかということで漁協・国交省と協議を重ね、昨年の春にワカサギの卵を20万匹放流しました。今年の春には40万匹を放流する予定です。今後ワカサギがダムで育つように環境づくりをおこなって将来的には釣り大会などの交流活動、また食品としての利用で地域の活性化へつなげたいと考えています。協議会のメインの行事といたしましてダム湖まつりを開催しています。約7年前から協議会が中心となり秋に実施しています。昨年ダム湖の名称を公募した結果、「さくらおろち湖」に決定し、まつりで発表をいたしました。まつりでは実際にダムの現場見学もおこないません。次に食についてですが、当日は地元で作りました山菜おこわ・いのしし汁の販売をおこないましたが好評ですぐに売り切れてしまいました。また、島大生の皆様の協力を得まして出店、会場準備などで交流をしています。年々来場者も増え前回のダム湖まつりでは5000人を越える方々に来場していただきました。最後に今後ダムの完成に伴いまして自転車競技・ボートレースなど交流人口が増えることが予想されます。この活動を通じて各団体の皆様と連携が取れるようになり、地域の活性化活動が広がるのではないかと期待しています。以上で発表を終わります。

【作野】

江角さんありがとうございました。趣旨にそって丁寧に説明いただきました。

続きましてNPO法人ふる里雲南 理事長 斎藤さんお願いします。

【斎藤】

NPO法人ふる里雲南 理事長 斎藤でございます。また道の駅「おろちの里」の駅長でございます。ふる里雲南の目的ですが、作家・五木寛之さんの「下山の思想」という本が爆発的に注目されています。経済成長が見込めない、成熟した日本など未だかつて経験したことのない日本を登山に例えてあります。道の駅も指定管理を受ける際に人口減の中で今後どのようにすればいいのか模索する組織となればいいのかではと思いました。

まず、「健康・安全・安心」等がうまく交じり合って回転していくようなダム周辺地域になればいいのでは、また市場縮小により競い合うのではなく互いに連携しながら幸せを求めていくことを目指していきたい。具体的な役割ですが、まず食については山菜、オーブ

ン時にはたくさんのお客さんが山菜を求めて来店いただきました。ダム周辺は山菜の宝庫でお客さんに満足していただいて我々も潤うということです。「安全・安心・低農薬・ふれ合い」道の駅がおしゃべりの場の提供ができるようにと考えています。震災に遭われた方々に支援をするためには我々が自立して、道の駅を拠点に活躍していきたいと考えています。

以上で発表を終わります。

【作野】

斎藤さんありがとうございました。最後は「自立するんだ。」という力強い言葉をいただきました。次はNPO法人布勢の郷理事 酒井さんお願いします。

【酒井】

私たちは「古事記の郷奥出雲ネットワーク」を平成22年の4月に立ち上げました。

会場を古民家のアトリエえんとして、御もてなし事業の取り組みを島根女性ファンドの助成金をいただいて平成22年度と23年度に実施しましたことを報告いたします。

活動の趣旨ですが、奥出雲に継承されてきた伝統行事食や御もてなし文化を掘り起こし各世代が連携し、地域活性の一翼としました。活動する上で3本の柱を設けました。

1つ目は地域の歴史や文化を学んで、存在意義や価値の再確認を行うこと。

2つ目は伝統行事食や御もてなしを学ぶこと。

3つ目は御もてなし食事会の開催。

まず、実際に行った活動が小規模集会です。地域の経験者から学ぶことから始めました。

秋祭りの膳組みなど調理実習を行いました。

第1回目が平成22年11月14日で御もてなし食事会秋祭り偏です。他地域から30名、地元30名で合計60名の餅つき大会など行いました。

第2回目は平成23年5月4日です。奥出雲の八重垣神社の大奉納と御もてなし食事交流会です。佐白地区には八重垣神社元宮、長者屋敷跡もありますので京都の能楽師の井上先生の門下生に能を奉納していただきました。その後、御もてなし交流会をアトリエえんで行いました。

第3回目は平成23年8月28日で夏の音楽の夕べと御もてなし食事交流会です。そば打ち体験を行ったりしました。参加者は40名とスタッフが15名でした。

NPO法人さくらおろちとの交流の一環として平成23年6月に自転車競技大会の際お茶接待で参加者と交流しました。

NPO法人さくらおろちの「食べごと塾」に平成24年2月に参画しました。

また、佐白地区交流拠点施設が平成24年4月29日にオープンします。

以上で発表を終わります。

【作野】

酒井さんありがとうございました。わかりやすい発表でした。

次はとんぼの会の事務局長糸原さんお願いします。

【糸原】

とんぼの会の糸原といいます。名称についてですが、会の趣旨がこの指にとまれということで、出れるとき、出来るときなどに参加していただきたいということで発足いたしました。会が出来た理由ですが、高齢化等により地域が衰退してはいけないということであることがきっかけとなりました。それは井上町長が平成21年にタウンミーティングを開催されその時がきっかけとなり出来た会です。とんぼの会は三沢のシンボルである要害山の入り口に古民家がありましたが、行政に改修をしていただいてこれを拠点に活動をしていきます。次に取り組みについて報告をします。古民家からふもとに向かって菜の花が咲き誇ります。作野先生を迎えて地域づくりについて学びました。また、交流人口の増に向けて田舎料理で御もてなしの取り組みを進めています。食材を地元で調達するということでしたけ栽培にも取り組みました。だいこん・かぶ・白菜なども作りました。現在は活動を始めたばかりなので各団体と連携をとり今後活動していきたいと思います。

【作野】

糸原さんありがとうございました。

■意見交換

【松村】

思った以上にすばらしい活動をしているなと感じました。横の連携というか下流部の人たちがいらっしゃるときに売買のルートを作ると活動が生きてくると思うし、テーマを決めたりなどの連携を図るとすばらしいことが出来るのではないかと思います。

【安藤】

今、総会時期で来年の人事をどうするかという地域がすごく多いです。今日話を聞きながらやりたい人が集まっているんだなと4団体の発表を聞かせていただきました。この時期は大変ですよ、しかしやりたい人が集まってやっているのがまさにとんぼの会でもあって仕組みができて地域社会が回っていくようになるとそれが理想なんだなと思ったりします。地域を変えていこうとすると地域の人がんばっていくしかないと思います。

【作野】

ありがとうございました。今から2つの論点について話をしようと思います。

一つは連携していく必要性、どのように連携をしていったらいいのか。組織内・地域内の連携があります。最初に酒井さんにお聞きします。取り組みをはじめる時にどのように呼びかけられて、どのように集まったのか教えてください。

【酒井】

最初は、実家の古民家が空いていたので地域で使えないかということを経元の人へ話をしたのがきっかけでした。呼びかけをおこなったのが理事の方で温泉施設・NPO法人もできるということで、相談して計画をしました。

【作野】

すごいですね。主体的に集まって活動をされたんですね。とんぼの会もこの指とまれで会を創られたのですよね。不安とかはなかったですか。

【糸原】

不安はありました。現在会員は39名いて男性は25名、女性は14名です。出れるとき・出られるときに集まって活動しています。

【作野】

雲南市側の2つの団体は長らく活動をおこなっておられて、地域内だけでなく他地域の団体と連携するにあたり見解をいただきたいのですが、最初に江角さん如何でしょうか。

【江角】

当初は雲南市との関わりが多かったのですが、NPO法人「さくらおろち」などに関わっていく中で、行事ごとの日程調整などがスムーズにいき、活動がうまくいくのではないかと期待しております。

【作野】

NPO法人「さくらおろち」はそういう使命を担っているわけですが、新しい仕事が増えていく中で期待にそえないところもありますが、がんばっていきたいと思います。斎藤さんからも連携のありかたなど何かありますでしょうか。

【斎藤】

NPO法人を立ち上げてから1年が経過しました。今までは見てみないふりをしていました。組織をまとめていかななくてはならないのにおどおどしていました。最近になってまとめることができるようになりました。他の組織との連携ですが、1, 2ヶ月に一回ぐらい会を開催し、行事予定を作りお客さんに配布したらいいのでは。

【作野】

まさに私たちもやりたいと思ってそういう方向で連携をしていきたいと思います。コメントーターの先生方から地域間の連携、組織内の連携についてこつなどアドバイスがありましたらお願いします。

【松村】

すでに「ダム湖まつり」がありますよね、出店する際にまとまらなければならないと思いますし事務局であるNPOから情報を流すことをやらなければならないと思います。

食を展開している方がいらっしゃいますね、昨日松江から来たのですが島根県は文化レベルが高いですので、神話という新しい国譲りのスタートとして、神話の時代の「食べ物」を考えてみることを提案します。また、来るときに感じたのですが、看板がなかったりルートが分からなかったりしたので、マップを作っていただきたいです。地元が連携してスタートしないことには駄目ではないかと思います。

【作野】

ありがとうございます。地域内でまとまる事に関しては、奥出雲地方は住民の皆様は力があると思います。続きましてもう一つの論点のほうにいきたいと思います。現場での課題をどうやったら解決できるのか、後半議論をさせていただきたいと思います。最初に酒井さんからお聞きしたいのですが苦労があったと思いますがどうでしょうか。

【酒井】

在住は松江で故郷は奥出雲ですが、40年ぶりに帰りまして勇気がいりました。以前お茶会を開いて地域の方に来ていただいて何かをやることで波紋がでてきて人とのふれあいが広がるのがきっかけです。今思うと地域の力とか潜在能力とかいうものはすごいなと思います。

【作野】

大変貴重なお話を伺いました。次にとんぼの会さんどうでしょうか。

【糸原】

今後、会が維持・発展していくかということです。地元だけでなく奥出雲町が活性化していくための起爆剤になればいいなと思います。これからは会員を増やしていきたいと考えています。

【作野】

中山間地だけでなく日本全体がかかえている問題だと思います。都市と連携することが必然だと考えます。江角さんとか斎藤さんは他の団体とタイアップしていらっしゃいますかどうかでしょうか。

【斎藤】

非常に苦勞しています。人口が減るにしたがって活気もなくなってきています。都市部の方に「おろちの里」のファンになっていただいてお互いに情報交換をしたいと考えています。

【江角】

活動に参加していただく方も年齢が上がっておりまして、今後どのようにしたらいいのか頭をなやましていますが、島大生さんと情報共有することでダム湖まつりにも積極的に参加していただきました。今後このようなことが進めていければ活性化にもつながっていくのではないかと思います。

【作野】

ありがとうございました。都市との連携に学生の力がかかせないと思います。時間となりましたので最後にコメンテーターの先生方からコメントをいただきたいですが。

【安藤】

作野さんが言われるように人数が減ってきているのも当然ですし、一番大切なのは縁やゆかりのある人をしっかりマークすることだと思います。雲南市・奥出雲町で出身者のリストを作り情報を送ることをする。また、物を送ることで交流をするべきである。プラスして学生さんであったりすると思います。もうちょっと本質のところまでの付き合いがでてくると次の新しい展開の可能性があると思います。

【作野】

どうもありがとうございました。続いて松村先生お願いします。

【松村】

出身者リストには必ず自分の兄弟とか親戚がいると思います。自分から情報を発信しないと駄目だと思います。何人かには必ず連絡するという体制を作ってほしい。また、自分達の町に何があってどういうことをやっているということを知って、教えることをしないと。来た方にはリピーターになっていただいて、皆さんのことをPRできるようなことをやっていただいて仲間へ伝えていくことをやればお客さんが増えていくのではないかと。

【作野】

コメンテーターの先生方からアドバイスをいただきました。是非、そういう方向でやっていきたいと思います。これでディスカッションを終了させていただきます。

【第3回を終えて】

○安藤周治アドバイザーの講演から

今回は、3回シリーズの集大成という位置づけで、地域づくりを主眼に「講演会」、「取り組み報告会」、「パネルディスカッション」の3部構成でシンポジウムを開催した。

第1部の講演では、「地域のたから」をテーマに安藤氏に講演してもらった。

地域再発見と、地域経済を循環させるためには「体験型の新しい旅」が必要であり、これに地域住民が関わっていくことで活発な地域づくりが実現するという趣旨であった。

この提案には雲南地域はピタッと当てはまり、古事記編纂1300年の年を迎えていることも大きな節目といえる。「ヤマタノオロチ伝説」をモチーフにゆかりのある地が多い地域内を整備して、訪れる人をガイドしたり、地元料理やそば打ち体験で共に語り楽しむプログラムを企画実行することで大いに盛り上がる事が期待できる。

早速実践したいと共鳴した。

○事業報告から

NPO法人さくらおろち専務の野田氏から、農林水産省交付金事業「食と地域の交流促進事業」の取り組みについての報告があった。

この事業は、下流域の住民を対象に、地域の伝統的な料理を地域の食材を用いて指導者のもとに共に調理して再現しようという内容である。なかなか、お年寄りのしっかりした方がいないと継承できていないメニューを、当時の状況を思い出しながら調理方法を説明する指導者の一言一言に耳を傾け、新たな発見をする参加者は「是非、次年度以降も参加したいので事業を継続してほしい。」という声を沢山聴いている。

新しい旅の一環として、是非とも組み入れていきたい事業であると感じた。

○パネルディスカッションから

ダム湖周辺で直接地域づくり取り組む4団体の活動報告をメインに、NPO法人作野理事長がコーディネーター、そして、コメンテーターにアドバイザーの安藤氏と松村氏という豪華な顔ぶれで「食と地域」をテーマに論議があった。

長年取り組んでいる団体、発足間もない団体があるが、それぞれに懸命な努力をしていることが貴重であると感じた。

地域づくりとは、上流部に位置するダム湖周辺と下流部住民がどのような形で共存し、交流を深めることができるのかが大きなポイントになると考える。

今回のシンポジウム全体のテーマが「食」にあり、真剣に地域の足元を見つめ、もっともっとブラッシュアップしなければならないことを痛感した。

3. 水源地域対策アドバイザー派遣により見えてきた課題及び成果

【課題】

ダム建設の代償ともいえる地域振興施設として島根県さくらおろち湖スポーツ競技施設をはじめ、行政が行った施設整備が完成した。これから、この施設をしっかりと活用して地域のにぎわいと、地域経済の活性化に向けた取り組みをしなければならない。このような時期に、水源地域対策アドバイザー派遣制度によって、3回シリーズでお世話になったことは非常に恵まれている。

地域の女性団体の取り組み、地縁団体、NPOの活動はまだ緒に就いたばかりで、これから互いに連携を図りながら、互いの持ち場を大切に、取り組みを深めていかなければならない。

それぞれの組織の自立と、連携という両面を上手にこなしていくことができるのかという大きな課題を抱えている。

【効果】

10余年にわたる研究会の結果を踏まえ、尾原ダム周辺地域の活性化を目指して、平成22年2月に「尾原ダム地域づくり推進連絡協議会」が発足し、翌平成23年3月末に「NPO法人さくらおろち」が立ち上がった。同時に、道の駅おろちの里の管理運営をする「NPO法人ふる里雲南」と、佐白温泉長者の湯の管理運営をする「NPO法人奥出雲布勢の郷」もスタートしている。

これらの団体は、発足当初のあわただしさと、自らの組織の自立に向かってエネルギーを費やしていても、互いの連携にまで考えが向いてこなかったが、この度の事業によって、自らの組織を盛り上げていくためにも互いの組織間連携が欠かせないことを確認することができた。

何より、雲南市と奥出雲町という行政の垣根を越えて、ダム湖周辺の地域づくりを共に実現していく意識共有ができたことが大きな成果である。

【終わりに】

国土交通省のご指導を得て、このような事業に恵まれ、強力なアドバイザーを3回連続で派遣いただきましたことに衷心より厚く御礼申し上げます。

今後とも、周辺地域住民、下流域住民、地縁団体、地域づくり組織、NPO法人、行政機関と密接に連携を図り地域を盛り上げていく所存でございます。

格別のご高配ご指導を賜りますようお願い申し上げます、報告とさせていただきます。